HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	障害児プログラム指導ボランティアの意識変化についての一考察：北海道YMCA学習障害児クラスの活動から
Author(s)	二宮, 信一
Citation	社会教育研究, 19, 57-71
Issue Date	2000-12-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28533
Type	departmental bulletin paper
File Information	19_P57-71.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

障害児プログラム指導ボランティアの意識変化についての一考察

——北海道YMCA学習障害児クラスの活動から——

二宮信一

はじめに

1995年より開始された札幌YMCA（以下YMCAは札幌YMCAを指す）の学習障害（以下LDと略す）児及びその周辺の子どもたちの援助クラス（プライム・クラスと呼ぶ）は，2000年7月現在138名の登録があり，その中でもソーシャルスキルトレーニングの場として設定されている第2土曜日のアクティブ・クラスには35名の小中学生・高校生が登録し活動している。LD児の指導には，一人ひとりの発達のバランスの悪さを理解する専門性が必要とされYMCAの通常のクラスは講師による指導が中心となっているが，このアクティブ・クラスはYMCAスタッフ及び講師の他に多くの青年ボランティアが参画している。

1999年7月に文部省は，「学習障害児に対する指導について」（報告）[1]を発表し，わが国においても漸くLD児教育が始まった。しかし，「LD」という言葉は一般においても，教育関係者においてもまだ理解されておらず，その啓発にはかなりの時間を要すると考えられる[2]。LD児教育は，まさに今日的な教育課題であると言え，このような背景から，このアクティブ・クラスの活動は，全国でも数少ないLD児を対象としたボランティア活動と言える。

筆者は，このプライム・クラスの担当者として開設当初より関わり，クラスの運営管理，LD児の指導及びボランティアの育成に関わってきた。本研究は，ボランティアが組織されてきた経緯を踏まえつつ，1999年度に行われたLD児の活動（「例会」）と「リーダー会」（ボランティアのミーティング）及び月1回開催されたLD児理解のための「学習会」についての検討と参画したボランティアへの調査（アンケート及び聞き取り）により，彼らがこの活動に主体的に参画するにいたった意識変化の様子をたどることにより，その要因を検討しつつ，指導者としての専門性の獲得方法や今日的なLD問題への受け止め，及びボランティアとしての自発性・主体性形成などの自分自身の課題の気づき等，どのような課題を発見し，発展させていったかについて明らかにしていきたい。このことが地域の中でLD児を取り巻く環境形成のあり方の検討に繋がると考えるからである。

1　LD児の教育的取組の状況

(1)　LD（学習障害）

LD(Learning Disabilities)の研究は米国において，1963年カークによる"Learning Disabilities"という用語の使用から始まり，1967年のマイクルバストによる微細脳機能障害（MBD）をLDとする提言により，全米に拡大し深められていった。その後，全障害児教育法(1975年)の中で，LDは障害のカテゴリーとして位置付けられ，公教育におけるLD児教育のシステムの構築が行われるようになっていった。現在では，各州の教育行政においてLDは明確にそのシステムの中に位置付けられ，個別教育プログラム（IEP）作成のプロセスには多職種の連携が図られ，リソースルームの活用などが日常的に行われる状況となっている。

わが国では，上村菊朗らによる医療的なアプローチと森永良子，上野一彦らによる教育的なアプローチの紹介から始まり，1980年代半ば頃より一部の研究者，教育者を中心に関心が高まってきた。しかしながら，90年代に入ってもなかなかLDの定義，診断，教育，個別指導法などについて枠組みが作られず，LDとはどのような障害をさし，どのように指導すればよいのかは，共有されないまま混乱が続いていた。1995年3月，文部省は「学習障害に対する指導について（中間報告）」[1]を発表し，LDの定義を明らかにするとともに，LD児及びその周辺の子ども達の存在を認め，その後，教育的指導上，特別な配慮が必要であることの啓発用リーフレットを作成し，全国の教育委員会に配布した。次いで1999年7月に「学習障害児に対する指導について」の報告[1]を発表し，2000年度，全国の実態調査を開始したのである。

(2)　LDの定義

1999年7月に文部省の発表したLDの定義は以下の通りである。

「学習障害とは，基本的には，全般的な知的発達に遅れはないが，聞く，話す，読む，書く，計算する又は推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す様々な状態を指すものである。

学習障害は，その原因として，中枢神経系に何らかの機能障害があると推定されるが，視覚障害，聴覚障害，知的障害，情緒障害などの障害や，環境的な要因が直接の原因となるものではない。」

LD児は基本的に知的発達に遅れがないため，ほとんどの子どもは普通学級に在籍しているが，その認知の偏りから通常の指導では学習に困難を示すとされている。またこの定義では直接触れられていないが「行動の自己調整，対人関係などにおける問題が学習障害に伴う形で現れることもある」[1]として学級での集団活動にも課題を持つ子ども達もいると解説されている。わが国の特殊教育制度は中・重度の障害児を対象に発展し確立してきたが，軽度の障害児やこのようなLD児への対応

はほとんど手が付けられていない状態であり，公教育におけるシステムもまだ作られていない[3]。

(3) 北海道における LD 児教育の状況

北海道における LD 児教育については，1991 年の北海道児童青年精神保健学会(会長　伊藤則博)における「LD 研究会」の発足から始まる。本研究会は 4 年半の歳月をかけ基礎的な研究を行い，北海道における LD 児教育のベースを作り上げた。その後，同学会より独立し，北海道学習障害児・者親の会「クローバー」も参加し，「北海道 LD 懇話会」として LD に関する地域ネットワークの中枢として活動を開始することとなる。一方，児童相談所や教育相談機関及び医療機関は LD 研究会(懇話会)と関わりながらも LD に関する研究を独自に進めていたが，LD 児を直接指導する機関がないことから，その閉塞感を高めていた。このような状況の中で，1995 年 YMCA は LD 児を支援するクラスを開設し，公教育や相談機関，医療機関との連携の中でその活動を開始したのである。

2　YMCA における LD 児教育への取組

(1) YMCA

YMCA とは"Young Men's Christian Association"の略で，キリスト教青年会と訳される。1844 年ロンドンで誕生した国際的な青少年社会教育団体であり，日本では 1880 年東京 YMCA が創立し活動を開始している。北海道 YMCA は内村鑑三らを中心に結成され，1897 年に創立した。現在は札幌，北見，帯広の三都市を拠点として，専門学校 (札幌)，幼児教育，語学，国際，体育　(ウェルネス)，野外 (キャンプ) などの教育活動のほか，障害児を対象とした水泳，体操，キャンプ，スキーなど幅広い活動が行われている。

特に 1962 年より札幌 YMCA で行われている肢体不自由児対象のキャンプは，現在では，脳性マヒ，ダウン症，知的障害のある子ども達も参加するようになり，この 40 年間毎年行われてきている。また，1982 年より自閉的傾向の子どもとその親を対象としたキャンプも開始された。1980 年より始まった自閉的傾向の子どもの水泳クラスやその後開設された体操クラスには，ダウン症などの子ども達も加わり 1999 年現在 220 名もの子ども達が通うに至っている。

(2) YMCA での LD プログラムの取組

全国の YMCA が LD 児のプログラムを開始したのは，1994 年 5 月の西宮 YMCA の LD クラス開講に始まる。その後，ボランティア養成講座やキャンプなどが行われ，1994 年 11 月には横須賀 YMCA が LD 児の水泳体験教室を行い，1995 年 5 月に学習援助特別クラスを開設した。東京 YMCA は 1995 年にディキャンプ，ボランティア研修，スキーキャンプ等を実施したあと 1996 年 4 月よりクラスを開始している。その他，とちぎ YMCA をはじめ大阪，熊本など全国の YMCA が LD

児のプログラムに取り組み始めている。

北海道YMCAは，札幌YMCAにおいて1994年12月よりLD児に対するプログラムの研究を開始，佐藤剛（札幌医科大学教授）の指導により1995年7月に親の会「クローバー」との共催で厚真町にて17家族の参加を得て1泊2日の親子キャンプを実施し，続いて同年9月に「LD児及びその周辺の子ども達」を対象とする支援プログラム「プライム・クラス」を2名の参加者を得て開設するに至った。

(3) YMCAプライム・クラスの内容

プライム・クラスは月～金曜の夕方に行う学習の基礎作り及びソーシャルスキルを指導するクラスと第2土曜日に活動するアクティブ・クラスを基本として構成されており，幼児4歳から高校生までを対象としている。いずれも3～5人を1グループとし，指導者が1～2名つく体制で運営されている。

LD児の躓きの現れかたは一人ひとり違い，学習の困難さはさまざまでありその状態像によりいくつかに分類されているが，YMCA入会時に提出される「事前調査書」によると，LD児はLDであるがゆえの学習の困難さに加え，多くのケースで対人関係での課題や心因的な問題も併せて抱えているのが実情であった。

表1は，1999年10月現在の在籍者96名の事前調査書をもとに保護者が「気になっているところ」として上げたものである。複数の課題をもっている子どもが多いので数字は重複して出ている。

これ以外では，意欲の喪失，感情不安定，興味の偏狭，不登校などが上げられる。これらの項目は，保護者の観察，関心による指摘のため正確な状態像を示すものとは言い切れない。また，YMCAが学習の基礎作りやソーシャルスキルを指導するという前提で集まってきている子ども達であるので，若干の偏りは否めない。しかし，「乏しい交友関係」を課題とする子どもが半数いることや「自信喪失・低い自己評価」が上位にランクされていることからも，対人関係での課題や心因的な問題を無視することができないことが窺われる。

表1　入会希望時の保護者が気になっているところ

乏しい交友関係	49	書字の障害	10
言語発達の遅れ	24	多動性	10
自己表現の未熟	24	規則・ルールの理解困難	10
自信喪失，低い自己評価	20	物の管理困難，忘れ物	10
集団行動困難	16	筋道を立てて話せない	8
集中困難	15	興奮・乱暴・反抗的な言動	8
協調運動障害（不器用）	14	欲求不満に対する低耐性	7
音声言語の理解・表出の障害	13	いじめ	7

(4) アクティブ・クラスの活動

月1回，第2土曜日に行われるアクティブ・クラスはプライム・クラス開設の翌年，1996年4月より開始された。例会は午前10時から午後3時30分の5時間半の活動である。グループは3－5人を基本とし，1－2名のボランティアが指導にあたる形で構成されている。99年度は32名の登録となっている。その中には旭川や富良野，帯広からの参加もある。表2は，1999年度の参加者の分布である。

開設当初は，小中学生を対象として開始されたアクティブ・クラスも，子どもの成長に合わせ98年度より高校生のクラスが開設され，活動の幅を広げている。プログラムは「ソーシャルスキルの向上をねらいとして，グループ活動を基本に，自分たちで計画したことを実行する体験学習型のクラス」として行われている。「考える」「調整する」「実行する」「見直す」ことを中心に進め，「楽しいことをするために計画する」というプロセスを通して考える習慣を身に付け，グループでの活動を基本とするので仲間作りにもなり，プログラムによってはさまざまな学習要素の取得にもなるとしている[4]。

(5) ソーシャルスキル

ソーシャルスキルは，1980年代以降関心が寄せられてきた課題で，対人関係を円滑にするスキルのことであり[5]，社会生活を送る上での基本的な行動様式や人間関係を築き続けていくためのコミュニケーション能力とされる。認知能力に課題を持つLD児にとって，このスキル行動を作り出す能力（コンピテンス）[6]の偏りは大きな課題となって現れ，日常生活の中で交友関係が乏しいということは，このような能力を獲得する機会も少なく，悪循環になっているといえる。アクティブ・クラスはこのようなソーシャルスキルを体験的に学ぶことを目的として行われているが，交友関係の乏しい参加者にとっては，自分が認められる場であり，日々のストレスの発散できる場として月1回の例会を楽しみにしている。

(6) ボランティア・リーダー

YMCAでは古くからキャンプなど青少年活動に青年の参画の場を作り，ボランティア活動として展開してきた。また，そのような場が参画する青年にとっても大変貴重な経験の場として位置付

表2　1999年度参加者分布

	男	女	合　計
小学生	11	5	16
中学生	6	3	9
高校生	6	1	7
合　計	23	9	32

けられてきていた。

アクティブ・クラスにおいても，LD指導という専門的な活動ではあるが，基本的な知識とそれに基づく配慮により，青年ボランティアの参画は可能であると考え募っていた。むしろ，「先生」「親」というような子どもにとってある種権威的な存在より，年齢の近い青年のほうが親しみやすく，LD児にとってモデル（行動の規範）としての効果もあると考えた。子どもたちはボランティアを「リーダー」と呼び，自分を理解してくれる存在として受け入れているようである。

当初より青年ボランティアの参加があった。96年度は，LD児を対象としたプログラムとしての関心から児童相談所職員やYMCA野外活動リーダーのOBなどが中心となって行われたが，社会人ということもあり継続して活動に参加することが困難であった。97年度は，彼らの呼びかけにより北大教育学部の学生らが多く集まり活動が行われた。いずれもLDに対する関心が高いボランティアが集まったといえる。しかし，4年生・大学院生が中心で時間的な余裕はなく，例会前日に準備をする程度でそれ以上の広がりをもつことができなかった。この2年間のプログラム立案はYMCAスタッフと講師によりなされており，打合せも直前に行なわれ，リーダー会として組織だった活動ではなかった。しかし，学習会は，97年度より定例化され月1回もたれており，97年度はケース検討を行っている。

このような中で，リーダー会として形作られたのは98年度からであった。YMCA野外活動リーダーのOBで幼稚園教諭であったMさんの呼びかけがきっかけとなっている。この頃より一般の学生・社会人も加わり参画するボランティアの背景も多様化し始め，LDを全く知らないで参加するボランティアが増えてきていた。そのため活動に初めて参加するボランティアには，スタッフによるLD基本理解とYMCA理解，ボランティア活動理解を柱とするオリエンテーションがもたれるようになった。リーダー会ではそれまでスタッフ・講師により行われていたプログラムの立案を自分達でやりたいとの希望が出され，そのためミーティングも毎週定例化した。これにより，子ども達との活動の「例会」とそのプログラムの立案・準備・評価のための「リーダー会」とLD理解のための「学習会」が平行して行われるようになっていった。98年度はこのベースが作られた年であったといえる。

3　1999年度の活動から

(1)　例会

表3は年間9回の例会の活動内容である。

これらの活動はすべてリーダー会で話し合われ，企画段階からリーダーの手により準備されている。中心となっていたMさんは仕事の関係で5月から札幌を離れたため中心的な役割から降りている。

表3　1999年度アクティブ・クラス活動一覧

日程			テーマ	活動内容
第1回	5月	全	リユース・オブジェ	不要品を利用して共同制作
第2回	6月	小中	父の日に贈ろう 折染めレター	折染め，手紙書き宛名書き
		高	外に遊びにいこう	行き方を調べる，係りを決める
第3回	7月	全	手作りお弁当大会	グループ毎にお弁当を作る公園に行き昼食
第4回	9月		台風のため中止	
第5回	10月	全	秋まつり	店番・客の体験
第6回	11月	小中	ビストロアクティブ おかずバイキング編	グループ毎に料理バイキングで昼食
		高	リーダーの家へ遊びにいこう	訪問の体験
第7回	12月	全	アクティブクリスマス会	クリスマス会の企画，準備，運営
9月の振替 1月		全	冬だ！元気にスポーツ大会	公園での雪中運動会 体育館でゲーム
第8回	2月	小中	とりっきりアクティブ	グループ毎テーマを決め写真撮影。写真展。
		高	幸せドリーム計画	チャレンジする個別の課題を決め練習。
第9回	3月	小中	アクティブカーニバル	1年間の活動の振り返りグループで寄せ書き
		高	幸せドリーム計画最終章	練習の成果の発表

(2)　リーダー会

99年度のボランティア・リーダーの登録総数は25名で男8名，女17名で，学生19名（高校生3名），社会人6名（内1名は高校中退）であった。運営のための負担が一部のリーダーに偏らないために毎月回り番で決める世話人（3名程度）によって運営の全般的な準備がなされており，リーダー会のミーティングは，プログラムのテーマ・素材を考える「世話人会」と参加するLD児一人ひとりの課題を考え，世話人から出されるプログラムの検討，修正，準備のための「リーダー会」とで構成されている。この両方を合わせると，年間で30回のリーダー会がもたれており，平均出席者数は5～6人であった。これ以外にも，例会終了後，評価会がもたれている。

担当するグループは基本的に固定されているので，リーダーは自分のグループのメンバーに照らし合わせて個別の課題を考えることとなる。またリーダー会では，自分のグループの課題について出し合い，話し合ってもおり，他のリーダーの指導上の工夫などを共有する場ともなっている。スーパーヴァイズは，YMCAスタッフと講師が行っていて，リーダーは自分のグループの指導上の課題を随時相談できる体制となっている。

(3) 学習会

一方，学習会は，「LD学習会」としてLDに関心のある指導者層の学びの場として設定され，公開で行われていてリーダーのみが参加して行われたわけではない。99年度も児童相談所心理判定員やYMCAスタッフ，幼稚園教諭，またレギュラーで市内小学校教員が参加している。

99年度の学習会は表4の通りであり，平均参加者数は11〜12名であった。この学習会は，LD理解（LDの基本的な理解，ソーシャルスキル・トレーニング，心理検査法の理解など）とLD児指導に認知カウンセリング[7]の考え方を有効に援用してみようという試みで研究が重ねられてきた指導法とを交互にいれ構成されていて，できるだけ現場の指導を考慮して行った。また，リーダーのLD理解，指導法理解の積み上げも念頭にいれて行なったため，実習・演習形式を基本とした。

学習会の指導には，LD児指導について研究・実践している市内小学校教員とYMCAスタッフ，講師があたり行われた。

(4) オリエンテーション

YMCAではLDプログラムに参加するボランティア・リーダーに対し，プログラム参加前に基本的なLD理解やプログラム・オリエンテーションなど指導者として必要なトレーニングを行っている。カリキュラムとしては，「LDの定義」「LDの状態像」「LD疑似体験」「二次障害について」「指導上の配慮」及び「YMCAボランティア・リーダーの役割と責任」で構成されている。先に述べたようにボランティアはほとんどLDについての理解がないまま希望してくるケースが増えてきているので，このオリエンテーションは，重要なガイダンスとなっている。

表4　99年度　LD学習会一覧

年間テーマ　「LD児の指導法」
　　—認知カウンセリングからのアプローチ—

日程	テ　ー　マ	担当
4月23日	認知心理学から認知カウンセリングへ	T
6月4日	ソーシャルスキルについて	N
7月2日	認知カウンセリング理解　1	T
9月17日	心理アセスメントと指導の視点	O
10月15日	認知カウンセリング理解　2	T
11月5日	LD児のソーシャルスキルの問題とその指導	N
12月3日	認知カウンセリング理解　3	T
2月4日	カウンセリング・マインド	O
3月17日	1年のまとめとして	T

4　ボランティアの意識変化

(1)　アンケート調査から

中心的な役割を担っているボランティア・リーダーの中から6人のリーダーにアンケートをとった。表5はその回答結果である。活動年数は調査した2000年8月現在のものである。これによると，ボランティア活動の経験は6人中5人にあり，福祉活動的なもの，野外活動，国際交流活動などその背景はさまざまであった。また，この活動以外のボランティア活動は行っていない。このようなバックグラウンドからLD児へのボランティア活動を始めた理由としては，Bさんのようなケースは大変特異なケースといえるが，その他は，友人に誘われたなど普通の回答である。しかし，続けている理由としては，「楽しい・面白い」と並んで「学ぶことが多い」とあり，いわゆる奉仕活動的な回答ではなく，自らの学習活動としてこのボランティア活動を位置付けている。開始当初，LD児への理解はほとんどなく，Aさんのように間違った考えをもって参加してきたケースもあった。LD理解に役立つこととしては，指導にあたっている講師との話し合いが大きいようであるが，例会に参加すること，直接子どもと関わることの体験という回答も見逃せない。

さて，彼らが参加している例会，リーダー会，学習会であるが，この3つは相互にリンクしているようである。Cさんの回答のように，例会をリーダー会，学習会(で学んだこと)の意味が問われる場として位置付けていたり，Fさんのようにリーダー会を子ども達の問題に合わせて考え，リーダー同士のディスカッションの場としている。

今日的教育課題としてのLD問題を尋ねてみたが，Bさんのように大変意識の高い回答と無回答とに分かれた。このことは，リーダーの学校の専攻によるところが大きいと考えられるが，Cさんのような回答もあり，LD児との出会いや理解の深まりから気付いてきた問題であると考えられる。最後にこの活動がリーダーにとってどのような場になっているかを尋ねたが，普段の生活を見直す場，生活の一部など，それぞれにとって重要な位置を占めていることを窺わせた。

(2)　聞き取り調査から

この6人のうち，1999年度の例会，リーダー会（世話人会），学習会の出席率の高かったAさんとCさんに聞き取りの調査を行った。

Aさん

Aさんは，Eさんの高校時代からの友人で，Eさんの紹介でこの活動に参加し始めた。作業療法科ということもあり，感覚統合訓練などLD児指導が学校での学びと重なるところも多く，LD児に関する理解が深まるにつれ，活動も積極的になっていった。Aさんは，その理由として，「リーダー会があったから」と答えている。お手伝い的なボランティアではなく，自分でやりたいと考えていた

表5　札幌YMCA LDボランティアへのアンケート

		Aさん	Bさん	Cさん
性別		男性	女性	男性
年齢		20歳	23歳	17歳
学校・職業		専門学校3年	大学院1年	無職（高校中退）
専門		作業療法科	学校教育	音楽
ボランティア経験				
	過去の経験	なし	自閉症児の遊びの活動，特殊学級運動会	YMCAアウトドアクラブ
	他の活動	なし	なし	なし
LDボランティアについて				
	活動年数	1年8か月	11か月	1年6か月
	参加理由	平坦な日常に活を入れるため	卒論を書くにあたって実際にLD児と関わることでLDについての理解を深めたかったから	友人に誘われたから
	続けている理由	面白い，自分でプログラムを組み立てる体験ができるから	毎回プログラム毎に子どもの様子（表情，行動など）が違っていて，彼らに関わるのが楽しいから。LDに関する情報が得られるのも大きい（学校では得られないので）	楽しいから（リーダーとの関係も，メンバーとの関係も），暇だから，勉強になるから
LDについて				
	LDの理解	知恵遅れの子どもだと思っていた	文部省で出された見解（99.11までのもの）勉強面でのつまづきに偏りがあるという程度	全く知らなかった
	LD理解に役立ったこと	学習会と先生方と話し合うこと本2～3冊読んだ	YMCAでの学習会，LDに関する本，実際の活動と活動前後のリーダーとのやりとり，先生が話した情報，学会	先生との話し合い
例会，リーダー会，学習会はどんな場か				
	例会	コツコツと積み上げてきた事を試し，打ち上げ成功させれた時は感動を得ることができる場	情報収集の場，子どもの接し方（視点），他のリーダーがどう考えているかを知ることができる	最近は日常になりかけている（良し悪しはあるけれど），リーダー会，学習会の意味が問われる場
	リーダー会	プライベートな場所，高級な趣味の場所		（苦しみのある）楽しさがある。どちらかと言えば趣味の場
	学習会	面白い話が聞ける。学校で学んだ事柄が重なっていたり，かすっていたり，教育現場でのLDのとらえ方を知れる。		趣味の場だけれど，それだけではないのがアクティブクラス，まじめにリーダー会，例会をするための，どちらかといえばオフィシャルな場
今日的教育課題としてのLD問題をどう考えているか				
		人間が多様であることを大人が知ること。また現場でもその事を子どもが自然に受けてくれればいいと思う。自分も子どもの頃から劣等感のようなものをもっているからかも知れない	今の学校教育の場では彼らが彼ららしく活躍できる場，それをフォローアップする体制が整っていない。そのことは，例会での子どもの様子を見ているとわかってくるように思う。	・対人関係が大事だと思う。・ソーシャルスキルというもの自体をもっと考えたほうがいいのかも知れない。・LDの子にソーシャルスキルを身に付けて生きやすいように変える前に，周りの環境がその子たちに合わせるように変わった方がいいと思う。
この活動は，あなたにとってどんな活動か				
		とても有意義	1週間の流れの中の生活の一部。ボランティア活動というよりは，子どもと同じ活動を通して同じ時間を過ごせる楽しい（だけではないが）場になっていると思う。	有意義な活動

Dさん	Eさん	Fさん	
女性	女性	女性	
21歳	21歳	20歳	
専門学校3年	大学3年	専門学校3年	
作業療法科	比較文化学科	作業療法科	

重度心身障害者親の会の子どもの預かり	国際交流などのお手伝い	老人ホーム	
なし	なし		

1年6か月	1年8か月	1年4か月	
友人に誘われて，LDの勉強（?），子どもの接し方を学ぶため	何かしたいと思っていた時に，以前少し参加したことがあったので，また参加してみようと思った。	障害児に興味があった。	
意外に勉強できることが多かった。子どもがかわいい，自分の子どもに対する態度，接し方を発見する。わからないことが多いが，続けないとわからないため。	面白い，学ぶことが多い	障害児と関わることが楽しいし，学ぶことが多い	

全く知らなかった	全く知らなかった	LD＝学習障害児	
学んでいない。友人の助言など。学校の授業ではかぶる場面が多く，役立つがそれを実際の場面で用いることは全く難しい。	先生方のお話　学習会　実際に例会に参加すること	直接，子どもと関わることの体験	

子どもとの接し方，子どもの特徴を少しでもつかむ場，子ども世界	実際にメンバーと接する場	月に一度の再会，楽しみ	
お互いの知識交換，考え方の違いの認識の場，自分の考えを認識できる場（話すことで気づく）	例会の準備，反省　他のリーダーとの話し合いなどをする場	プログラムを子どもたちの問題に合わせて考え，リーダー同志のディスカッションの場	
LDなど学問的に理解する場，知識を増やす	LDについての理解を深めたり視野を広げる場	今日的教育課題としてのLD問題をどう考えているか	

難しい質問。まだ自分なりの見方は作られていない。とにかく参加している状態。	普通学級にも特殊学級にも居場所がないということ。公教育の場でLD児の居場所が確立されていないこと。		

子どもを相手にすると変わる自分に息抜きを感じる。自分の違う側面を発見できる場。子どもの世界を見ることで自分の普段の生活を見直すまではいかなくとも少し異なる視点で見れる。	普段の生活では考えなかったり気づけなかったりすることを考える機会になる		

Aさんにとってリーダー会は，子どもの問題とプログラムとの両方に関われるところとして魅力を感じたようだ。また，LDの理解の場としては例会が一番と言い，プログラムの成功，失敗がそれぞれ理解を深める契機になっているという。自分の担当の子どものほか，他のグループの子どもにも学校のことなどを聞く機会を作っていて，彼らの将来について不安だと答えた。今日的な教育課題としてのLD問題をLD者の社会的な自立などより深い形で捕らえていることを窺わせた。

Aさんは最後に，もっと専門性を持って指導していきたい，卒業後も可能であればこの活動を続けていきたいと考えていることを話してくれた。

Cさん

Cさんは中学時代からYMCAの活動に参加し，高校1年の1月の高校中退前後から積極的にこの活動に関わるようになったという。実際には，高校入学時よりこの活動に参加していたが，本人の実感としては，1年の終わりからのようである。LDについては，親の仕事の関係で情報としてはすでに持っていたという。アンケートで「全く知らなかった」と回答したのは，「出会っていない」という意味で解釈したようだ。彼もまた，この活動の参画の理由が「リーダー会」であった。当初中心となっていたMさんに誘われて参加している。例会・プログラムよりリーダーと話しをするのが好きで参加したという。しかし，学習会に参加することで学んだことが子どもの指導にどう生きるのか，と考えるようになってから，子どもの問題に目を向けるきっかけができたという。また，「子どもに声かけが出来るようになっている自分を発見する」という自己の変化に気付くようになってから活動の視点が大きく変化してきたという。その意味で，Cさんは，例会を「別格」な場として，リーダー会を自分のグループの子どもの現状を考える場，学習会をLDの子どものことを考える場として整理し，今は担当している子どもの課題を中心に考えが展開しているという。Cさんはリーダーの中でも積極的に世話人を買ってでており，会の有力なメンバーとなっている。

この聞き取りをして二人に共通することがいくつかあった。二人とも「子どものため」には「自分のため」と考えていることであり，このリーダー会にはプライベートな付き合いがほとんどなく，例会，リーダー会，学習会の時だけあっている，それでもお互いを尊重しあい，認めることができるということである。Cさんはこのリーダー会は目的意識がはっきりしている集団だからと答えてくれた。

5　考　　察

LD児へのボランティア活動を通して，ボランティアの意識変化のありようについて整理してきた。この活動の場合，活動のベースがリーダー会であり，学習会でLD理解が深められ，例会で実践するという相互の関係がうまく機能しているケースとして考えられる。リーダー会の記録では，4

月当初から10月の秋口まで，主にプログラムの立案・準備を中心に話し合いがもたれ運営されてきていた。しかし，11月ころより，リーダー会の話の中心が「子ども」となり，自分のグループの子どもにとって，行われるプログラムがどのような意味があるのかを考え，話し合いがもたれるようになってきている。特に，LD児一人ひとりの発達のバランスの課題，ソーシャルスキルの課題など，それらの問題へのアプローチとしてのプログラムという発想がリーダー自身から出てくるようになった。このことは例会，リーダー会，学習会を通して，子どもとの関係が深まり，子どもをより深く理解することができるようになることによって「担当した子どもの課題の発見」となり，ボランティアに意識の変化をもたらしたと考えられる。

それゆえ関心はかなり個別化された形で現れてはいるが，それが活動への意欲を高めると共に，むしろそのことにより，ボランティア自らの課題の発見やLD問題の全体像を捉えようとする問題意識が芽生えてきていることが窺われた。

この意識変化の有りようは，以下のように整理することができる。

1．プログラム及びリーダー会への主体的な関わり

ボランティア活動への参加の理由に「友人に誘われたから」というのが見受けられるが，このことは参加するにあたって，さほど深い理由があったわけではなく，むしろお手伝い的な意味合いが強かったのではないかと考えられる。しかし，リーダー会の回り番で担当する「世話人」というシステムが機能しているため，皆が会の運営に対し考える機会を持ち，その経験により会の運営に主体的にならざるをえない仕組みが出来ていたことが大きいと考えられる。当初，リーダー会の中に役割を固定しないシステムを作ることによって，構成員の負担が一部に偏らないようにしようという試みであったが，むしろ，構成員の主体的な関わりを促す仕組みになっているように思われる。

2．プログラムサービス提供者から学習者へ

「ボランティア活動を続けている理由」を設問としたのは，参加の理由が何であれ，そこに留まっていることを決定した自己の意識が浮かび上がると考えたからであるが，ほとんどの回答の中に，「楽しいから，面白いから」という回答と同時に「学びがあるから」と答えている。YMCAにおいて多くの青年のボランティア活動（野外活動，キャンプ・スキープログラム活動など）があるが，そのほとんどはプログラムサービスの提供である。つまり，ボランティアはプログラムサービス提供者として機能している。しかし，プログラムサービスの提供者が学習者へと変化するということ，つまり，それらの活動の中から様々な学びを得る視点を持つことが出来るようになるということは，活動の意味合いを大きく変化させる。「子どもに声かけが出来るようになった自分の発見」など，そこにおける「学習内容」はそれぞれのボランティアによって異なるであろうが，サービスを受ける者と提供する者の関係において，基本的な関係の変化を見出すことが出来ると考える。

3．LDの今日的課題の気付き

LDを取り巻く課題は，公教育の問題のみならず，その後の進学，就労，就労後の仕事の継続，余暇など，教育的なシステムや地域の理解などこれから作り上げられなければならない課題が山積みである。関わりあった子どもの個人的な課題を通して，これらの今日的な課題に気付いていくことは社会を構成する一員としての自己の存在への気付きでもある。自らの存在を社会的な存在として気付くことの困難な時代にあって，この意識変化は貴重なものと言える。

学齢期のLD児を取り巻く環境について考えただけでも，親，教師，クラスメイトの理解を中心とする「個人的なステージ」のほか，学校体制・取組，関係機関との連携支援システムを考える「組織的なステージ」，YMCAのような民間の教育機関など学校外教育（地域・民間）との連携支援システムを考える「地域社会的なステージ」及び学級人数，指導体制，通級指導教室などLD児の教育システムの課題である「構造的なステージ」などが考えられる。しかし，LDという問題そのものがまだ一般に理解されていない状況の中で，LD児自身は家庭や学校においてなかなか理解されない困難な生活を送っており，対処療法的にもこのような活動の場が求められる。そして，このようなボランティア活動を通してLD児を理解し，指導にあたる層が拡大されていくことは今後益々重要な意味を持つと考える。このことは，単にLD児にとっての問題ではない。このような子ども達との活動を通して，ボランティアである青年自身が教育・社会の問題や自分自身の問題を発見する契機を得ており，むしろ，LD児・者を受け入れる地域づくりにおいて，その素地を作っている活動でもあると考え得るのである。そのような意味で，ボランティアが意識変化をもたらす要因とその展開を探ることは，今後展開されるであろうLDの啓発活動を生かすためにも大変重要な問題であるということができる。

文献

1）「学習障害及びこれに類似する学習上の困難を有する児童生徒の指導方法に関する調査研究協力者会議」　文部省　1995，1999

2）これに関する具体的な調査は全国的には行われていないが，「静岡県浜松市における小中学校教員の学習障害についての認識に関する調査」　伊藤政孝，第46回小児保健学会，1999，252-253pがある。

3）「日本における学校教育とLD」　柘植雅義　日本LD学会機関紙第8巻1号，2-8p

4）YMCAプライム・クラス入会案内　1999，北海道YMCA

5）「相互作用をする人々の目的を実現するための効果のある社会的行動」Argyle（1981），「他者から正の反応を引き出し，負の反応を回避する手助けとなるような形で相互作用を行うことを可能にする，社会的に受容される学習された行動」Carstledge & Milburn（1986）など定義には

諸説ある。

6）Trower（1982），具体的には，情報に気づく，行動を検索する，感情を知る，自分を知る，他者を知る，意欲を持つなどが考えられる。

7）「学習を支える認知カウンセリング」 市川伸一，ブレーン出版